

## 李退溪の教育観の現代的意義

### (一)

『書経』の「無逸篇」に、周公旦の次のような言葉がある。  
嗚呼、君子所其無逸、  
先知稼穡之艱難、乃逸  
則知小人之依。相小人、  
厥父母勤勞稼穡、厥子  
乃不知稼穡之艱難。乃  
逸乃諺、既誕。否則侮  
厥父母曰、「昔之人無  
聞知。」

嗚呼、君子其の無逸を所と  
す。先づ稼穡の艱難を知る。  
乃ち逸すれば則ち小人の依る  
を知る。小人を相るに、厥の  
父母勤勞稼穡し、厥の子乃ち  
稼穡の艱難を知らず。乃ち逸  
し乃ち諺し、既に誕す。否ら  
ずんば則ち厥の父母を侮りて  
曰く、「昔の人、聞知するな  
し」と。

正 田 啓 佑

この文は、周公が武王の子（甥）の成王を戒めた言葉で、  
分かりやすく言うと、

ああ、君子たるものは、何処に居ても逸楽に耽つては  
ならない。まず農耕の苦しみを知って、そこで楽しみを  
求めるならば、民が何を樂しむかが分かるう。ところで  
下々の民を見ると、彼らの父母たちが農耕に精をだして  
働いているのに、子供たちは農耕の苦しみを知らないで、  
遊びほうけている。そして口では大きなことを言い、そ  
うでなければ父母を馬鹿にして、「年寄りは何ものを知ら  
ないし分かっている」という。

この後に周公は、過去の王の事績を述べて、成王に遊樂  
に耽つたり、酒に溺れてはいけないと戒めるのであるが、  
周公の昔から、豊かになればそれを築いた親や先人の努力

の賜物であることを忘れて、その時代の安楽な風潮に流され、安逸に耽ることは今日まで続いており、それが人情の趨勢なのである。

今日、何はともあれも豊かになったのはいいが、苦しみを乗り越えて豊かさを築いた先人や先輩の苦勞は理解せず、安楽に流されている。したがって努力することを厭い、経済的不況に際しても克服できず、手を拱いているだけで、他からの救いを待つだけのようである。このことは、教育についても同様で、その結果は学校崩壊、学級崩壊や学力低下、そして校内暴力というような現象に表れ、大学についても、『分数のできない大学生』とか『少数のできない大学生』<sup>(\*)2</sup>というような本が出版され、物議をかもしている。特に、大学で教えているものから、学生がどのような勉強をしてきたかを考えると、彼らはただ大学に入るための勉強であり、如何にして容易に入るか、効率よく勉強して、よい成績をとるかという功利的な考えである。そのため入試科目の少ない大学を選び、また入試科目以外は勉強しない。その勉強たるや合格点を取るための方法を学ぶことが重要なのであって、知的好奇心を満足させることや、人間的な修養のためなどと言うものとは別なのである。

このような状況の中で、学問や教育について考えているときに読んだのが、李退溪の「四学の師生を論す文」(『退

溪先生文集』卷41<sup>(\*)3</sup>)であり、考えさせるものが多かった。そこでこの文から、学校や学問の在り方を考えてみようというのが、本論の目的である。

## (二)

この文は、『退溪先生年譜』(卷二<sup>(\*)4</sup>)の嘉靖32年(明宗の8年・1553)の条に「三十二年癸丑四月、拜大司成。通文四学、論諸生。賜学田、率諸生上箋謝。」とあることから、李退溪53歳の時のことであり、ここに大司成を拝すところあるのは、成均館の学長になり、大学行政の長として責任ある立場に就いた上での、当時の四学(学校)の状況とそれに対して李退溪が切々と論じた文が「四学の師生を論す文」なのである。従ってそこには李退溪の学校教育に対する考えがよく表れている。その文は次のような言葉で始まる。

学校、風化之原、	学校は風化の原(源)、首善
首善之地。而士子、	の地なり。而して士子は礼儀の
礼儀之宗、元氣之寓	宗、元氣の寓なり。国家、学を
也。国家設学而養士。	設けて士を養ふ。其の意、甚だ
其意甚隆。士子入学	隆なり。士子、学に入りて以
以自養。寧可苟為是	て自ら養ふ。寧んぞ是の浅蔑を
浅蔑哉。而況師生之	為すを苟くもすべけんや。況ん

間、尤當以礼儀相先。  
師嚴、生敬、各盡其道。其嚴非相癘也。

其敬非受屈也。而皆

主於礼、礼之行也。

又不外乎衣冠之飭、

飲食之節、揖讓進退

之則而已。

や師生の間、尤も当に礼儀を以て相ひ先んずべし。師は嚴に、生は敬み、各々其の道を尽くす。其の嚴は相癘ぐるに非ざるなり。其の敬は屈を受くるに非ざるなり。而して皆礼に主として、礼を之れ行なふなり。また衣冠の飭、飲食の節、揖讓、進退の則に外ならざるのみ。

ここで先ず、学校とは風俗教化の源であり、世の中の模範となるものを確立する処であるとし、そこで学ぶ士子（士族階級の子弟）は礼儀を根本におき、元気を内に持っているものである。そして国は学校を設立して、士子を養成するので、その意義は非常に大きいのであり、従って士子は自分で修養するので、軽薄な、恥ずべき行動をとるようなことはないのである。まして先生との関係においてはなおさらであるが、特に礼と（正しい在り方としての）義に於てはそうである。つまり師（先生）は厳しく学生に対し、学生は敬意をもって師に接して、それぞれの正しい道を尽くすことである。その嚴しさとは、学生を虐げ苦しめるということではない。また敬意とは学生の卑屈さを受けることではないのである。そこには礼（社会的規範）に則つ

た正しい在り方で実行するのである。それは服装や飲食などに節度あることや挨拶から挙措態度だけではなく、全てについてだと言う。

ところで、現在の学校（退溪当時）の状況はどうであつたかという、次のように述べている。

竊觀今之学校、

為師長為士子、或未免胥失其道。非

但学規不講、並與

学令而大壞、不嚴

不敬、反相為癥。

其在国学、不可謂

無此。而四学尤甚。

窃かに今の学校を観るに、師長

為り、士子為るもの、或いは未だ

胥な其の道を失ふを免れず。但だ

学規の講ぜざるのみに非ず、並

与（とも）に学令すれども大いに

壞れ、嚴ならず敬ならず、反つて

相ひ癥ゆと為す。其の国学に在り

ては此れ無しと謂ふべからず。而

して四学尤も甚し。

仄聞、四学儒生

視師長如路人、視

学官如傳舍。常時

具礼服者、十無二

三、白衣黑笠、唯

唯往来。及其師長

之入、受業請益、

姑不言。至以行揖

仄聞するに、四学の儒生、師長

を視ること路人の如く、学官を視

ること伝舎の如し。常時礼服を具

ふる者、十に二三も無く白衣黒笠

して、唯々として往来す。其の師

長の入るに及べば、業を受け益を

請ひ、姑くはもの言はず。揖礼を

行ふを以て憚りと為し恥と為すに

礼為憚為恥。偃臥

至る。齋中に偃臥し、睨めども出

齋中、睨而不出。

ず。これに問へば、則ち公然とし

問之則公然答曰、

て答へて曰く、我礼服無しと。

我無礼服。

これは、現在の大学の状況に思い当たるところが多いのだが、これを現代風に言い換えると、教師も学生もそれぞれの本来の在り方を見失っており、そのうち四学の学生が最もひどいという。彼らは先生を道端の人（全く関係のない人）のように見、学校をホテルか下宿屋か何かのようにみている。そして学生にふさわしい服装をしている者（当時としては礼服があった）は10人のうち2、3人もいず、授業を受けるときは、役立つことだけは抜け目なく求めるが、積極的に質問することはない。そして授業が終わっても、挨拶をするのを恥ずかしいと思つてか嫌がり、教室で寝転んで（現在だと居眠りに当たろうか）いるのを睨みつけても出て行かない。どうしてそんなデタラメな服装や態度をとるのかと理由を聞くと、「私は服を持ちません（だからこんな恰好をしているのだ）」というような答えをする。李退溪は、「竊かに観る」とか「仄聞する」という言葉で間接的な情報として述べているが、この後に続けて学生の乱暴狼藉の状況を述べた後に、「滉（李退溪の名）、去年、郷に在りて伏して聞く」として、次のことを述べる。

聖上挙視学盛典、

聖上、挙げて学を視るの盛典

大駕所臨、諸生或不

に、大駕の臨む所、諸生或いは

知拝跪之礼。及大駕

拝跪の礼を知らず。大駕の宮に

還宮、又不待祇送而

還えるに及ぶも、またただ送る

散去。

を待たずして散去す。

国王が、学校の視察に行幸されたのに、学生は国王に対する礼儀をわきまえなかつたし、その上、還御されるときに、見送りをもせずばらばらに帰ってしまったという。李退溪はどうしてこんなことになるのか不思議に思っていたが、今日の学校の状況から考えると、それは怪しむに足りないことだと思ふようになったという。その理由として、

平日不知敬師長之

平日より師長を敬うの心を知

心、即異日不知敬君

らざるは、即ち異日君父を敬う

父之心。

の心を知らず。

と述べて、日頃から恩師や年長者を尊敬する心がないからだ。そして、この学校に学びに来ている学生は、皆才能ある優秀な学生であるからには、恥を知り、礼を好み、自重することのできる者である。それなのに、このように自分の好き勝手なことばかりするような学生にしている原因はどこにあるのか、それは「師長の不職の過ちに由るなり」という。つまり先生になった人が、その教師という職業に適していないからだ。彼ら教師は自分の職務に対して誇

りを持たず、そのため努力はせず、たまに頑張る人も在るが、大抵は積極性はなく、従来通りのまにあわせのやり方で、揖礼も行わず、教え諭すこともせず、教師としての道を行っていないのだということを、当時の四学の官員（国立大学の教官）について述べる中で次のように言う。

今、四学官員、所以の者は、また甚しく蔑裂して、仕進に勤めず。学舎は常に空にして、院宇に異なる無し。因循苟且、不行揖礼、間々仕進有るも、因循苟且して、揖礼を行はず、教訓を以て事と為さず。凡そ処する所多く其の道を失ふ。

このように李退溪の言葉は、今日の教育問題にとっても、切実な問題である。教師のなかには、ともすると自分のことは棚に上げて、責任を学生や社会に負わせようとするものがあるが、李退溪の当時も同様であった。その結果として次のようにいう、

新学少年、不深於義理、昧於師生之分、妄生輕侮之心、狃逸習非、馴致傲狠、若

新たに学びし少年は、義理に深からず、師生の分に昧く、妄りに輕侮の心を生じ、逸に狃れ非を習ひ、傲狠に馴致すること

李退溪の教育觀の現代的意義

是則夫豈独諸生之過哉。

是くの如ければ、則ち夫れ豈に独り諸生の過ちのみならんや。

つまり新たに学び始めた少年は、義理を深く理解しているわけではないし、また先生と学生の関係についてもよく理解していないから、悪い遊びや邪まな考えに染まってしまうと自分を見失って傲慢になり、前述のような学生になる。これは学生だけの責任ではない。李退溪自身このような事態に対して「一日此れに居れば、則ち常に一日の責有るべし。聞く所、見る所、憂歎に勝へず」と言つて、成均館の大司成という責任ある立場の退溪として、次のように意見を述べている。

自今以往、師長舍公私事故外、必須逐日齐仕。仕必行礼、礼畢開講、日以為常。諸生必須各具礼服、盡出行揖、讀書請益、日用飲食、無不周旋於礼義之中。

今より以往、師長、公私の事故を舍くの外、必ず須らく日を逐ふて齊しく仕ふべし。仕ふるときは必ず礼を行ひ、礼畢りて講を開き、日以て常と為す。諸生必ず須らく各々礼服を具ふべし。尽く出るときは揖を行ひ、書を読みては益を請ひ、日用の飲食は礼義の中に周旋せざるなし。

先生たる者は、特別な公私の事が無い限り、必ず毎日出仕

(出勤) して、仕事に精を出すべきである。その時はまず必ず礼から始め、それから講義をする。これを日常とする。学生は必ずそれなりの礼服を揃え、外出するときにはそれに適した装いをして礼になつた挨拶をする。学問をするときから、日ごろの飲食に至るまですべて、礼になつた行動をとることである。

この礼になつた行動をとることを初めとして、学校で具体的にどのようなするかを決めたものに「伊山院規」(『退溪先生文集』巻41) というものがある。『退溪先生年譜』の嘉靖38年(1959)5月の条に、「伊山書院記」を作るとあり、その下の割り注に、「院中の規約を定む」とある規約こそこの「伊山院規」であり、李退溪59歳のときである。

### (三)

伊山書院というのは、榮郡の小白の南に正徳年間(1506-1521・中宗の時代)に設けられていたが、嘉靖戊午(1558・明宗の13年)の年に、学校を整備し規約をつくり、書院の由来と精神を記した文を李退溪に委嘱したので、退溪は朱子の「白鹿洞書院揭示」の精神を受け継いで書いたものである。そこには次のように言う。

抑嘗聞之、人之有道也、無教則近於禽獸。聖人有憂之。教以人倫。三代之学、皆所以明人倫也。 （\*5）

抑嘗聞之、人之有道也、無教則近於禽獸。聖人有憂之。教以人倫。三代之学、皆所以明人倫也。 （\*5）

「伊山書院記」 （\*5）

ここで李退溪は、曾て聞いたことだが、人としての道を学ばなければ、禽獸に近くなる。そこで人倫を明らかにし、教えることであるという。この文の後に科挙の試験によって地位と利禄を得ようとして、そのため学生の心は狂乱の中に奔走させられ、本心に立ち返れなくなっている。それは国学から郷校にいたるまで、本質を見失って本当の教育を忘れていた。そこで有志之士は発憤詠嘆し、書物を抱いて自然の中で人倫の道を明らかにし、後世のために書院を作るのは当然のことである。そこで退溪は朱子の「白鹿洞学規」にのっとり、五倫に基づいて、窮理篤行を学としていくことを述べているのが「伊山院記」である。

ここで、「伊山院規」の重要な点を検討するために、関連の条目を掲げると次の通りである。本来この条目には、番号を付していないが、便宜上付けて説明する。

1、諸生読書、以四書五經為本原。小学家礼為門戸。遵国家作養之方、守聖賢親切之訓、知万善本具於我、信古

道可踐於今。皆務為躬行心得明体適用之学。其諸史子集、文章科挙之業、亦不可不為之旁務博通。然当知内外本末・輕重・緩急之序。常自激昂、莫令墜墮。自余邪誕・妖異・淫僻之書、並不得入院近眼、以乱道惑志。2、諸生立志堅苦、趣向正直、業以遠大自期。行以道義為歸者為善学。其処心卑下、取舎眩惑、知識未脱於俗陋、意望專枉於利欲者為非学。如有性行乖常、非笑礼法、侮慢聖賢、詭経反道、醜言辱親、敗羣不率者、院中共議擯之。

3、諸生常宜静処各斎、專精読書。非因講究疑難。不宜浪過他斎。虚談度日、以致彼我荒思廢業。

4、無故無告。切無頻数出入。凡衣冠作止・言行之間、各務切悞、相觀而善。

5、半宮明倫堂、書掲伊川先生「四勿箴」、晦菴先生「白鹿洞規十訓」、陳茂卿「夙興夜寐箴」。此意甚好。院中亦宜以此掲諸壁上、以相規警。

6、書不得出門。色不得入門。酒不得釀。刑不得用。

7、諸生与有司、務以礼貌接、敬信相待。

この他に、短い条文が5条あるが、今は取り上げない。

さて1番から見ていく。

1、学生の読書は四書五経を根本にするのは、儒学を学ぶうえでは当然であるが、『小学』と『朱子家礼』を入

門とするのは、礼の重視の表れである。5の「四勿箴」は『小学』に収められているのも初学者にとって意味があるわけだ。これらから聖賢の切実な教えを学ぶことで、国家に役立つ人になれるのである。性善説のもとに、自己の道德的本性に目覚め、身をもって実践せよと言ひ、科挙の試験勉強もしてはいいが、そこには何が根本的で重要か、何をすぐせねばならないかというように、順序をわきまえなければいけない。個人的感情的に溺れたり、欲望の誘惑に惑わされてはいけないともいうのである。

2、学生は、志を立てて、それに向かって強い意志をもって苦しくともやり抜く、性行は正しく真つすぐで、道義的な正しい行動をとりながら、大きな目標を掲げて邁進する。卑俗下劣な行動、また利欲に眩惑されたりしてはならない。礼法を嘲ったり、聖賢を馬鹿にしたり、人倫に悖る醜いことを言ったりしたりして、親を辱めるようなことをしてはならない。もしこれに反対するような者が居れば、皆で議して、院中より追い出さなさい。

3、読書においては精読し、疑問点は徹底的に究める。雑談などに時間を浪費することや、妄想などで、自分の目的を失ってはならない。

4、教室で無駄なお喋りはしてはいけない。理由もなくやたら教室に出入りしてはならない。自分の言動から挙措にいたるまで慎重にせよ。

5、教室に程伊川の「四勿箴」、朱子の「白鹿洞規十則」、陳茂卿の「夙興夜寐箴」を壁に掲げて、学生の戒めとして読ませよ。ここの「四勿箴」というのは、『論語』の「礼に非ざれば視ること勿れ。礼に非ざれば聴くこと勿れ。礼に非ざれば言うこと勿れ。礼に非ざれば動くこと勿れ」という礼を基本においた言葉によるもの。書物は学校から持ち出すな。色気（欲望を刺激するもの）は学校に入れてはならない。酒を学校で作つて（飲むのも含めてであろう）はいけない。刑罰は学校では処置せず当局に任せる。

7、人に対するときは、礼にかなった態度で、敬意と信頼の心で接せよ。

これを読むとき、現在の学生に、思い当たることばかりで、これを現在の大学や、学校に掲げれば、学生の勉学の態度から、学生自身の修養に役立つ言葉だと強く感じるのである。この中で、李退溪の考えの中心である、朱子の「白鹿洞書院揭示」について、少し言及を試みたい。

#### (四)

「年譜」によると、先に述べた「作伊山書院記」の条の嘉靖38年5月に、李退溪は「答黄仲挙論書白鹿洞規集解」を書いてゐる。その部分の割り注には「集解、朴松堂英所著、有差誤處、先生為之辨釋」とあり、また『退溪先生文集』巻19の割り注には「松朴堂有集解、近始刊行」とあるように、その頃刊行された集解について退溪は、その解釈に誤りがあることを述べているというのだが、この朴松堂（名は英、字は子実、松堂は号。1471-1521）の『白鹿洞書院集解』を読んだ黄仲挙（名は俊良、号は錦溪。1517-1563）が、師の李退溪に質問をしたのに答えたのがこの「答書」であり、その中に、退溪の教育観がうかがわれる。

李退溪は、まず、質問の「其の義を正して其の利を謀らず、義を以て利に対して説く。而してまた利とは義の和なりというを引くは、謀らざるの意に於て如何」について、心に「有所為（何かのためにすると言う面がある）」の3字が心にあれば、衆人の利己貪欲と同じ穴に陥るので、少しでもそのような心を持つてはならないという。その後、に「愚、嘗つて（白鹿洞学）規の後の諸説を反復して、僭かにこれが論を為して曰く」と述べて、教育に関して自説を



展開して次のように言う。

先王教人之法、今  
可見者大学小学也。

小学之教、固所以盡  
人事之纖微曲折、至  
於大学、雖有以極其  
規模之大、然以言乎  
其知、則就事物而後  
言窮格、以言乎其行、  
則由誠意正心修身、  
而後推之於家、國、而  
達之於天下。其教之  
有序、而學之務實也  
如此。其論治也猶不  
過存心出治之本而  
已。<sup>★7</sup>

先王の人を教ふるの法、今見  
るべき者は大学小学なり。小学  
の教へ、固り人事の纖微曲折を  
尽くす所以、大学に至りては以  
て其の規模の大を極むこと有り  
と雖も、然れども其の知を言う  
を以てするときは、則ち事物に  
就いてしかる後に窮格を言ひ、  
其の行を言うを以てするときは、  
則ち誠意・正心・修身よりし、  
しかる後にこれを家・國に推し、  
而してこれを天下に達せしむ。  
其の教への序有り、學の實を務  
むるや、此くの如し。其の治を  
論ずるや猶ほ心を存して治を出  
だすの本に過ぎざるのみ。

李退溪は、教育書として見るべきものは『小学』と『大  
学』であると言ひ、『小学』の教へは人倫の細かな点を論  
じており、『大学』は格物致知、正心誠意修身から齊家治  
國、平天下にいたることを問題にしているが、そこには先  
ず身近な人倫の教へから天下國家にいたる順序があり、ま

た抽象的な究明より、現実的に実質のともなった実践こそ  
が肝要であることを述べている。また為政者は存心、つま  
り人倫にもとずいた本心を失わず、それを確立することが  
政治を行う人の根本に必要というのである。

この後に、退溪はその理由を、儒学（の方法）は、高い  
ところに昇るには、必ず低いところから昇り始め、遙か彼  
方の遠いところに行くには、必ず近いところに行くことか  
ら始まる。つまり一歩の足を上げないでは昇れないように、  
全てにそれは言えるという。それは迂遠で緩慢なようであ  
るが、これが確実な方法で、仏教の「一挙に悟るようなや、  
道教の登仙するような」とは違うというのである。

このような考えが、一つのまとまりとして体系化したの  
が、宣祖王の元年（戊辰、1568）、退溪68歳の時に奉つ  
た「聖学十図」で、その5番目に、「第五白鹿洞規図」<sup>★8</sup>が  
ある。この図の後に、退溪は、朱子の「洞規後叙」の後に、  
「臣今謹んで規文の本目に依りて此の図を作り、以て觀省  
に便ならしむ」という文を書いて、そこで次のように述べ  
る。

三代之学、皆所以  
明人倫。故規之窮理  
力行、皆本於五倫。

三代之学は、皆人倫を明らか  
にする所以なり。故にこれを規  
すに窮理力行するは、皆 五倫  
に本づく。

つまり、学問をするということは、人倫を明らかにするためのもので、白鹿洞学規に、窮理力行（理を窮め、力め行う）するというのは、全て五倫にもとづいているのである。そして窮理の要となるものは、博学・審問・慎思・明弁であると退溪は図示しているのである。そしてこの部分は、『中庸』の第11章（朱子章句第20章）からのもので、「人が一度してこれを成すことができたのなら、自分は百度してでもやり抜き、人が十度してこれを成し就けたのなら、自分は千度してでもやり抜く。このようにすれば、愚鈍な人も必ず賢明になり、柔弱な人も必ず剛強になるだろう」と続けて述べている。これが儒教の努力主義の表れである。

## (五)

以上述べて来た李退溪の教育や学問に対する考えについて、退溪自身の言葉をあげると、

先生（李退溪）嘗曰

先生嘗て曰く、「叔父松齋

「叔父松齋公勸学甚嚴、不仮辞色。嘗背誦論語

公、学を勧むるに甚だ嚴にして、辞色を仮らず。嘗て論語

兼集註、自初章至終篇、不差一字。……余之不

を集註を兼ねて、初章より終篇至るまで、一字も差はず背

怠於学、皆松齋教督之力也」。

誦す。……余の学に怠らざるは、皆松齋の教督の力なり」と。

ここで、叔父李 禺（松齋）の厳しい指導のもとに学び、朱子の『論語集註』を一字も誤ることなく暗誦した。このように学問に怠ることなく励んだのは松齋公の力という。この孜孜として学ぶ姿は「志を立てて群せず、自ら能く勤苦し、厳しく課程を立てては貫誦精思す」と描かれている。また次のようにも言う、

先生嘗言、「吾少

先生嘗て言ふ、「吾、少時発

時発憤為学、終日不

奮して学を為し、終日輟めず、

輟、終夜不寐、遂得

終夜寐ねず、遂に痼疾を得。未

痼疾。迄未免病廢之

だ病廢を免れざるの人にいたる。

人。学者須量其氣力。

学ぶ者は須らく其の氣力を量る

当寝而寝、当起而起、

べし。当に寝ぬべくして寝、当

隨時隨處、觀省體驗、

に起くべくして起き、隨時隨處

不使此心放逸而已。

に、觀省體驗し、此の心をして

何必如此、以致生病

放逸せしめざるのみ。何ぞ必ず

乎」。

しも此くの如く、以て病を生む

を致さんや」と。

李退溪の若い時の勉学に対する激しい態度が分かる。昼夜をおかず勉学に勤しみ、遂に病氣になってしまった。その結果、病氣がちの人間になったので、学問をする人は、自分の力量を考えて、寝るべきときには寝、起きるときには起き、時と処にしたがって、觀察・反省し、また體驗し

て、自分の心を放逸にならないようにすることであり、このようにすれば、病にはならないだろうと言うのである。また読書についても、

先生曰「止是熟。

凡読書者、雖曉文義、若未熟、則旋読旋忘、未能存之於心、必也。既学而又加温熟之功、然後方能存之於心、而有浹洽之味矣。」<sup>(\*)11</sup>

又曰「読書之要、

必以聖賢言行体之心而潛求默玩、然後方有涵養進学之功。若忽忽說過、泛泛誦說而已、則是不過章句口耳之末習、雖誦盡千編、白首談經、亦何益哉。」

先生曰く、「ただ是れ熟すのみ。

凡そ書を読む者は、文義を曉ると雖も、若し未だ熟さざれば、則ち旋（たちま）ち読み、旋ち忘れ、未だ之を心に存する能はざるは、必なり。既に学びてまた温熟の功を加え、然る後に方（はじめ）て能く之を心に存して、浹洽の味有らん」と。

また曰く「読書の要は、必ず聖賢の言行を以て之を心に体して潛求默玩し、然る後に方めて涵養進学の功有り。若し忽忽として説き過ぎ、泛泛として誦説するのみなれば、則ち是れ章句口耳の末習に過ぎず、誦すること千編を尽くし、白首にいたるまで經を談ずと雖も、また何の益有らんや」と。

李退溪の教育觀の現代的意義

と述べて、熟読と体得とを要としている。いくら文意が分かったように思っているでも、熟読玩味していなければ、すぐに忘れて心に残らないのである。それに対し、熟読して心に温めていけば、全てを貫いて理解できるようになる。また聖賢の言行によって心から理解し、静かに思考を深めるなら、少しずつ水が染み込むように修養でき、また学問も進んで行く。もし慌てて説いたり、軽々しく喋るだけなら、それはただ口先だけの浅はかなもので、千回唱えても、白髪になるまで談じて、何の益があるのかという。

李退溪の学問は、「於日用動靜語默上用功、平易明白、無甚高遠之事」<sup>(\*)12</sup>と言うように、自分の日頃の行為の中の修養であり、誰にでも理解されるもの。何も難しい高遠なことではない。そして次のようにも言う、

為己之学、以道 己の為にする学は、道理を以て理為吾人之所当知、 吾人の当に知るべき所と為し、徳行為吾人之所当 行もて吾人の当に行ふべき所と為す。

と述べるように、『論語』の「己の為にする学」を行うことと、道理にかなった、つまり人として誰もが為すべきことを為し、道德的に正しい事を行うということである。

最後に、李退溪の教育觀の中心にあるものは、人倫の道

と、それを支える礼であり、それは敬に基づくのである。そのことを理解した上で学生は、志を立ててそれに日々邁進し、努力することが求められるのである。それは何も高級な理論ではなく、日常の実践から始まるのであり、それはまた何時でも何処でも当然できることであり、しなければならぬことなのである。現在、自分の身の回りを振り返るとき、ここに述べてきたことは全て平易で理解できることであり、当然為すべきことであることを知りながら、それを実践しない人々の多いこの世の中こそ、李退溪のここに述べている心を思い、勇気を奮い起こして実践しなければならぬのである。

## 注

- (＊1) 和田秀樹『学力崩壊』(PHP研究所、1999年8月)  
河上亮一『学校崩壊』(草思社、1999年2月) 朝日新聞社社会部編『学級崩壊』(朝日新聞社、1999年5月) など多数あり。
- (＊2) 西村和雄 他編『分数ができない大学生』、同編『少数ができない大学生』(共に東洋経済新聞社、1999年6月、2000年3月)
- (＊3) 『韓国文集叢刊』(30) 所収、P 422-424。以下の引用文もこれによる。『退溪全書』10 (退溪学訳注叢書10) P 56-

に全文の訳がある。

- (＊4) 『韓国文集叢刊』(31) 所収、P 225。
- (＊5) 『退溪先生文集』巻42、同上(30) P 445-447。
- (＊6) 同前書 巻19 P 479-484、『自省録』(日本刻版 李退溪全集) 下巻) P 345-350。
- (＊7) (＊6)に同じ。なお、この文について、次の2書を参照。  
阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』(東京大学出版会、1971年第2版) P 270-279。高橋進『李退溪と敬の哲学』(東洋書院、1985年9月) P 230-232。
- (＊8) 『退溪先生文集』巻7、同前書(29) P 205-206。
- (＊9) 『増補退溪全集』第4冊(張立文主編『退溪書節要』所収、P 530)
- (＊10) 同前書、P 534。
- (＊11) 同前書、P 546。次の条も同じ。
- (＊12) 同前書、P 554。次の文はP 561。

## テキスト(文献資料)

- 阿部吉雄 編『日本刻版 李退溪全集』退溪学研究会1975年11月刊。
- 『退溪先生文集』(『影印標点 韓国文集叢刊』29、30、31。民族文化推進会 1981年刊)
- 『陶山全書』(一)-(三)『退溪学叢書』第Ⅱ部第1-4巻 退溪学研究院1988年刊)
- 張立文 編『退溪書節要』人民大学出版社1989年9月刊。
- 賈順先 編『退溪全集今注今訳』四川大学出版社1991、

1993年刊。

○退溪学叢書編刊委員会編『退溪全書』（退溪学訳注叢書）1―17、退溪学研究院。1991―1994年。

※本論は、韓国の安東大学退溪学研究所等の主催による「李退溪誕辰500周年記念国際学会」2001年10月12―13日において発表したものを骨子として、これに補筆、補正を加えたものである。